

# コイナー化における社会的意味と社会階層の役割

## －日本のブラジルポルトガル語変種の事例－

松本 和子(東京大学) 奥村 晶子(東京大学)

### 1. はじめに

本稿は在日ブラジル人コミュニティにおける方言接触とコイナー形成に関する研究の途中経過を報告するものである。日系移民の受け入れが開始されて以来、さまざまな視点から在日ブラジル人に関する社会言語学的研究がなされてきた。しかしブラジル各地からもたらされたポルトガル語の諸方言が日本各地で接触し、さらに日本語との接触も加わりながら、どのようなコイナー(接触方言)が形成されつつあるか、という観点からの言語学的調査は見当たらない。本研究はまさにそうした先行研究の穴を埋めようとするものである。

いわゆる「ディアスポラ言語」としてのポルトガル語で使用される R 音の研究は社会言語学的に非常に興味深い。なぜならば多様な「variants(変異形)」が言語的環境によって、またブラジルの地域によって異なる分布を見せているため、方言接触とその結果を考察するのに適しているからである。松本・奥村(2019)は R 音の中でも「Strong-R<sup>1</sup>」に焦点を当てた研究の中で、祖国を離れ新天地で変容を遂げるディアスポラ言語変種の変化の過程と結果を理解するためには、①移民の出身地と方言の特定、その数・割合を調査究明すること、そして②祖国の言語変化の歴史の変遷を考察することの重要性を指摘した。本発表では「Coda」つまり音節末の R 音へと分析対象を広げ、上記①②のみならず、さらに③話者の「社会階層(social class)」および祖国で各変異形が帯びている「社会的意味(social meaning)」を精査することが「移民コイナー(immigrant koine)」(Siegel 1985)の形成のプロセスと帰結を理解するうえで有益であることを論じる。

### 2. 在日ブラジル人コミュニティ

本研究が調査対象としている茨城県常総市は外国人居住者が人口の 7.7%を占める地域であるが、その中でもブラジル人が最多で、その多くが食品工場で就労している。ブラジル人を顧客とするスーパー、レストラン、美容院、スポーツジム、ポルトガル語で利用できる教会、ブラジル人学校などが揃い、ポルトガル語だけで生活を営む人もいる。

当該地で行った一連の予備調査の結果(図1)<sup>2</sup>、①ポルトガル語は二世へも継承されていること、②日本語能力に関しては、日本の学校へ通う二世とブラジル人学校へ通う二世では有意な差があることが判明した(松本・奥村 2019: 251)<sup>3</sup>。

本研究ではブラジルからもたらされたポルトガル語変種が日本でどのような変容を遂げているか、その変化の過程と結果および諸要因を解明することを目指している。具体的には、①起点として位置づけられる祖国ブラジルのポルトガル語の諸方言の特徴と変化のありさまを捉えたいうえで、②移民一世がどのようなポルトガル語の方言を常総市へもたらしたのか、③二世がそれを継承する過程でどのような変容が観察されるのか、を主に方言接触と方言変化の観点から精査していく。また日本語も流暢な話者もいることから、言語接触の視点より日本語の影響が見られるかどうかにも注視する。

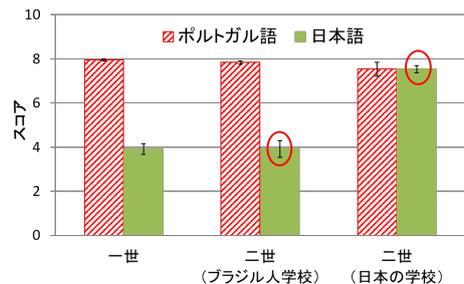


図1：口頭言語能力への自己評価 (松本・奥村 2019: 252)

### 3. 分析の枠組み

本研究では方言接触および言語接触に関する以下の理論的枠組みを採用する。まず、Mufwene (2008)の提唱する「フイーチャープール」である。これは方言接触の状況下において様々な方言要素が話者の頭の中に蓄積されている状況を抽象的に表現したものである。ここで重要なのは言語接触の環境下においては「外来言語要素(xenolectal feature)」と呼ばれる

<sup>1</sup> ブラジルポルトガル語における R 音に関する研究では、音節構造に基づき一般的に「Strong-R」「Weak-r」「Coda」の3つに分けて分析される(詳細は松本・奥村 2019: 254-255 を参照)。「Strong-R」は軟口蓋、口蓋垂、声門にかかての後部位置で発音される摩擦音を指し、語頭の<ç>と母音間の<rr>で現れる。

<sup>2</sup> 図1は一世と二世の138名を対象に行ったFeijo(2016)のアンケート調査を再分析したものである。詳細は松本・奥村(2019: 260)を参照されたい。

<sup>3</sup> Mann-Whitney U Test (U=93.500, N<sub>1</sub>=26, N<sub>2</sub>=37, p<.0005, two-tailed)。

非母語システムからの要素もさらに加えられることである。話者はそうしたフィーチャープールにある既存の要素を維持・選択することもあれば、複数の要素を組み合わせるなどしてインプット方言にはなかった新たな構造を作り出すこともある。さらに Mufwene (1996) は、移民が長期間定住した地域で形成される新たな言語変種が初期の移民のもたらした方言要素を基盤とする傾向を指摘し、これを「創始者効果」と称する。

一方、Trudgill (1986) や Britain (2018) は、方言接触によって生み出される新たな方言が形成される際に起きる言語的過程を類型化し、これを「コイナー化のプロセス(koineization processes)<sup>4</sup>」と呼ぶ。最も一般的なプロセスとして「平準化(levelling)」が挙げられる。これは「方言混合(dialect mixing)」において多数派の変異形が生き残り、「有標な(salient)」変異形が消失する現象を指す。この文脈における「有標性」とは、①新天地において数の面で少数派であること、②世界的に見て稀な言語的性質を有すること、③明確にステレオタイプの対象とされていることなどを意味する。



図2: ブラジルの方言区画 (Canepari 2017)

#### 4. 調査の概要

本研究では茨城県常総市のブラジル人コミュニティにおいて一世と二世 (18名, 42名) の計 60 名より①アンケート、②単語の読み上げ、③談話データを収集した。今回は①出生地・居住歴・就学歴・職歴に関する質問への回答、② R 音の中でも「Coda」、つまり音節末に<x>を含む単語の読み上げデータに絞って定量・定性分析を行う。ブラジルポルトガル語の音節末<r/>ほどの変異形でも入りうる言語的環境と見なされ(Rennicke 2015)バリエーション研究が盛んに行われている。本発表では porta (ドア) などの語中の音節末<x>、mar (海) などの語末の音節末<x>を含む延べ 29 語 (語中 12 語、語末 17 語) を対象とし、計 1,740 トークンを分析していく。

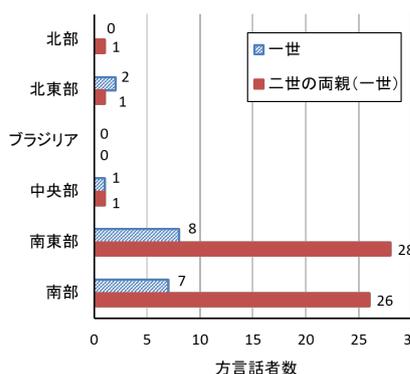


図3: 常総市の移民一世の出身方言

#### 5. 分析

##### 5.1 コミュニティの方言的背景

「創始者効果」を検証するため、まず常総市へ移住したブラジル人移民一世がどのようなポルトガル語の方言を日本へ持ち込んだのかを探る。図2の音韻に基づいた方言区画(Canepari 2017)によると、ブラジルのポルトガル語の方言は「北部」「北東部」「中央部」「ブラジリア」「南東部」「南部」の6つに区分される。

次にこの方言区画と照らし合わせ、常総市の移民一世の方言に関する背景を整理していく。出生地・居住歴に関する質問への回答を参照し、臨界期以前に最も長く時間を過ごした地域の方言を話者の出身方言とした。対象としたのは常総市の移民一世 102 名である(一世 18 名と二世 42 名の両親 84 名)<sup>6</sup>。整理の結果、サン・パウロ州やパラナ州の出身者が圧倒的に多いことが判明した(詳細な出身地は Matsumoto & Okumura 2020 を参照)。図3は一世の回答を上記の方言区画に分けて示したものである。ここから常総市の移民一世はブラジルポルトガル語の南東部方言と南部方言話者が大多数を占めることが明らかになった。こうした一世の方言は、現在形成しつつある二世のポルトガル語変種へ強い影響を与え得ると予測される<sup>7</sup>。

##### 5.2 ブラジルにおける音節末<r/>の地理的分布・通時的変化・社会的意味

図4は音節末<r/>の地理的分布を示している。ここからブラジルでは全国的に軟口蓋摩擦音[x]が優勢形であるが、常総市の移民一世の主な出身地域(赤い丸で囲んだ地域)では歯茎はじき音[r]とそり舌接近音[j]の併用が南部から南東部に広がり、[x]はリオ・デ・ジャネイロやその北側にあるミナス・ジェライス州に限られていることがわかる。

一方、Rennicke (2015: 45-46) は音節末<r/>の通時的変化の研究の中で Noll (2012) を引用しながら、①[r]はポルトガル本土からもたらされた最古の変異形であるが、現在それが残存しているのは特定の地域に限られていることを指摘している。さらに、②リオ・ジ

<sup>4</sup> 紙幅の制限のため、ここでは本稿で関連のあるプロセスだけを取り上げた。

<sup>5</sup> 話者がどこで言語形成期を過ごしたかがその後の言語使用へ大きな影響を及ぼすことから、本研究では①日本で生育した二世 21 名と②ブラジル生まれではあるが、幼少期に来日し言語形成期を日本で過ごした 21 名を二世として分析する。

<sup>6</sup> 本研究で扱う一世と二世の多くは親子関係にない。二世は親に連れられて来日したことから、当然ながら二世の親も常総市のブラジル人コミュニティの一員(一世)であるため調査対象とした。なお「両親の出身地が不明」「父親がペルー人」などの場合を除いた計 75 名に関する回答に基づき図3を作成した。

<sup>7</sup> 松本・奥村(2019: 259)はブラジルへ渡った邦人移民が上記の地域に集住する傾向がある(Sakurai & Coelho 2008)ことから、日本国内に誕生した他の在日日系ブラジル人コミュニティにおいても類似した方言構成、あるいは類似したコイナーが形成される可能性を示唆している。

ャネイロやその北部にあるミナス・ジェライス州中部以北では音節末/r/は「Strong-R」と同様に後部位置で発音され[x, h]のように摩擦音化し、③ミナス・ジェライス州西部以南の多くの地域では接近音[j]へ変容しつつも古い[r]と共存しているという。

さらに Oushiro & Guy (2015), Oushiro & Parafita Couto (2018)はこれらの変異形の社会的意味を指摘している。商業・文化の拠点であるリオ・デ・ジャネイロとサン・パウロでそれぞれ使用される[x]と[r]はメディア各種・公人に用いられており、「顕在的威信(overt prestige)」形として都市部を中心に社会階層の高い話者に好まれるという。対照的にサン・パウロの郊外や南部方言地域に居住する社会階層の低い話者に好まれてきた[j]は、従来「田舎の教養のない(rural, uneducated)」話し方という評価が付与されてきたが、近年そうした評価が薄れ「連帯感(solidarity)」を醸し出す「潜在的威信(covert prestige)」形として都市部へもその使用が拡大しているという。以下、異なる社会的意味を持つ複数の変異形が接触する常総市の状況を見ていく。

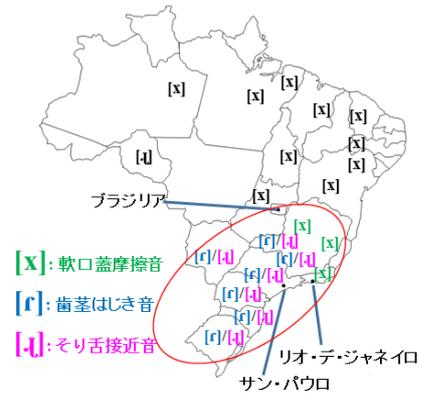


図4: 音節末/r/の地理的分布 (Noll 2008 を改編)

### 5.3 常総市在住一世の音節末/r/の分布と社会階層

表1: 一世の音節末/r/の分布 出現数 (出現率)

表1は一世の単語リストの読み上げ結果を語中・語末別に示したものである<sup>8</sup>。結果はサン・パウロ州やパラナ州を含む南東部・南部方言地域で併用されている[r]と[j]が一世の間

	[r]	[x]	[h]	[r]	[j]	∅
語中	3 (1.4%)	0 (0.0%)	1 (0.5%)	113 (52.3%)	92 (42.6%)	2 (0.9%)
語末	9 (2.9%)	1 (0.3%)	2 (0.7%)	67 (21.9%)	179 (58.5%)	34 (11.1%)

で多数派を占めていることを示した。具体的には、[r]は語中では5割強、語末では2割強の使用率を、[j]は語中では4割強、語末では6割弱の使用率を示し、二つとも甲乙付け難い優勢形だと言える。一方、リオ・デ・ジャネイロや北部・北東部方言地域で広く浸透している「Strong-R」化した変異形[x]や声門摩擦音[h]、歯茎ふるえ音[r]は語中で1.9%(N=4)、語末で3.9%(N=12)の使用に限られていた。言い換えれば、これはサン・パウロ州やパラナ州の出身者が圧倒的に多い常総市における方言接触の中でそれ以外の地域で使用される変異形は少数派であり、平準化のプロセスの中で消失したと解釈することができる。つまり、これはコイナー化のプロセスに合致した結果だと言える。

ここから一世の職歴および就学歴を整理し、音節末/r/の実現形と話者の社会階層の関係を考察する。まず職種に関しては、常総市の移民一世102名(一世18名と二世42名の両親84名)<sup>9</sup>を対象とし、移住前と移住後の職業を調べた。整理の結果、ブラジルでは店員が最も多く、次に事務職と工場勤務が多かったが、日本での雇用は工場が圧倒的多数を占めることが判明した。つまりブラジルの職場では同僚にならなかったような話者同士が常総市の工場で共に働いている状況が浮かび上がってきた。一方、就学歴に関しては言語データを収集した一世18名のみを対象としたため小規模で一般化はできないが、過半数は高卒(11名, 61.1%)、残りは大卒(5名, 27.8%)、専門学校卒・中卒(各1名)であった。

ここから話者ごとの音節末/r/の使用を考察してみると、語中では主に[r]、語末では主に[j]といった使い分けをした話者は3名のみであり、大半の一世は[r]あるいは[j]のいずれかを主に使用する話者であることが判明した。語中・語末の(いずれかの)位置で8割以上[r]を使用する話者は5名おり、その学歴は大卒と専門学校卒が大半を占め、現職は自営業者と教員であった。一方、圧倒的に[j]を使用する話者は7名おり、二名を除き全員が中卒か高卒、大半が現在工場に従事していることが判明した。このことから話者の学歴・職業が一世の音節末/r/の実現形に関与していることが浮かび上がってきた。つまり、祖国ブラジルと同様に常総市においても社会階層の高い話者は[r]を好み、社会階層の低い話者は[j]を好む傾向が確認された。これは本国内で各変異形が帯びている社会的意味が少なくとも移民一世の間では踏襲されていることを示唆している。

### 5.4 常総市在住二世の音節末/r/の分布

表2: 二世の音節末/r/の分布 出現数 (出現率)

次世代ではこうした傾向はどのように継承されるのだろうか。表2は二世の単語リストの読み上げ結果を語中・語末別に示したものである。結果は二世の間で[j]の使用率が語中・語末いずれの位置においても9割

	[x]	[h]	[r]	[j]	∅
語中	0 (0.0%)	0 (0.0%)	23 (4.6%)	453 (89.9%)	7 (1.4%)
語末	2 (0.3%)	1 (0.1%)	4 (0.6%)	680 (95.2%)	13 (1.8%)

前後まで高まり、急速に収束していることを示している。それとは対照的に一世の間では甲乙付け難い優勢形のひとつであった[r]は語中で4.6%、語末では0.6%まで使用が激減し、さらに一世の間で少数形であった[x, h, r]に関しては[r]は使用されず、[x, h]の使用(0.4%)は語末に限定されるなど、優勢形の[j]との競争に敗れ平準化が急速に進行していることが見て取れる。

ではなぜ一世と二世で著しい世代差が生じたのか。その疑問を解く鍵は本国ブラジルにおける[j]の社会的意味にありそう

<sup>8</sup> 紙幅の制限により、本稿の表から「その他」は除いた。表1では19トークン(語中5トークン、語末14トークン)、表2では35トークン(語中21トークン、語末14トークン)不明瞭な発音や non-rhotics などが見られた。後者に関しては表1・2にある「∅ (zero variant)」とともに今後より詳細に分析する予定である。

<sup>9</sup> 詳細は注6を参照されたい。なお転職したものを含むため、合計数は被験者数と合致していない点に留意されたい。

だ。一世は祖国での生活を通じて従来[r]の持つ「田舎の教養のない話し方」というステレオタイプを認識しており、仮に普段は[r]を使っているとしても単語の読み上げタスクではそれを意識的に回避し、あえて威信のある都会的な[r]を発音した可能性がある。実際に一世で100%[r]を使用した話者から「このリストを読んだら田舎者だってばれちゃうじゃない」とい発言も聞かれた。今後は自然談話データの分析を進め、一世にスタイルシフトが見られるかどうかを究明していきたい。

では常総市でなぜ[r]ではなく[r̥]が勝ち抜いたのか。その手掛かりは①移住前と移住後の一世の職業の変容と②本国で進行中の言語変化にありそうだ。[r]と[r̥]を用いる話者が工場などで共存する常総市で生まれ育った二世には、話者の社会階層と各変異形の結びつきが明確ではなく、またブラジルにおける[r]の従来のステレオタイプを認識していない可能性がある。その一方で、通信機器の発達により本国の現代風の話し方に触れる機会に溢れる移民社会で、二世がサン・パウロの若者の間で使用が拡大している[r̥]を今風の話し方だと認識し、常総市においても連帯感を醸し出す潜在的威信形として積極的に取り入れている可能性も考えられる。今後は話者の意識(perception)に関する実験などを行い、より詳細に分析していきたい。

もう一つ特筆すべき点は日本語が流暢で日本の小学校へ通う二世が **preferir** (好む) という単語の語末の<r>を歯茎側面接近音[r̥]のように発音したことである。[r̥]は移民一世が祖国ブラジルから持ち出した音節末/r/の変異形には存在しておらず、さらに日本語話者が英語を学習する際に/l/と/r/を混乱する現象を彷彿させる。この話者は「Strong-R」の研究(松本・奥村2019)では **rural** (田舎の) という単語の語頭の<r>を日本語の「フ」のように両唇摩擦音[ɸ]で発音し、**pirraça** (意地悪) という単語の母音間の<r>を日本語の「ラ」のように[r̥]で発音している。Mufwene(2008)の主張するように、日本語との接触によって非母語システムの影響を受けインプット方言にはなかった新たな構造を作り出している可能性も考えられる。この点も自然談話データの分析を進め精査していきたい。

## 6. 結論

本稿は前回の「Strong-R」の研究(松本・奥村2019)と同様に音節末/r/の研究においても、移民一世のもたらしたブラジルポルトガル語の諸方言が常総市で接触した結果、平準化が起り、それが二世に継承されてさらに収束の方向へ変化が加速する一方で、競合する言語である日本語からの影響も示唆されたという事例を提供した。同時に、平準化のプロセスを経た一世の方言が、二世のポルトガル語変種の基盤となっていることを示し、在日ブラジル人コミュニティのコイネー形成における創始者効果の概念およびコイネー化のプロセスの有効性を実証した。前回の「Strong-R」(松本・奥村2019)および本発表の音節末/r/の考察から、祖国を離れ新天地で変容を遂げるディアスポラ言語変種の変化の過程と結果を理解するためには、①移民の出身地と方言の特定、その数・割合を調査究明すること、②祖国の言語変化の諸相、③各変異形の社会的意味とその変容、④話者の社会階層に関する知見を加味することが重要だと言えるであろう。

## 参考文献

- Britain, D. (2018). Dialect contact and new dialect formation. In C. Boberg *et al.* (eds.), *Handbook of dialectology*. Oxford: Blackwell.
- Canepari, L. (2017). *Portuguese pronunciation and accents: Geo-social applications of the natural phonetics & tonetics method*. Muenchen: LINCOM GmbH.
- Feijo, F. (2016). A sociolinguistic investigation of the Brazilian community in Ibaraki, Japan. MA thesis. Tokyo: University of Tokyo.
- 松本和子・奥村晶子 (2019). 在日ブラジル人移民のコイネー形成—方言接触、創始者効果、フィーチャープールの検証—『社会言語科学』22(1): 249–262.
- Matsumoto, K. & Okumura, A. (2020). Ecology and identity in koineization: Cake baking in a diaspora Brazilian Portuguese speech community in Japan. *Asian and African Languages and Linguistics* 14.
- Mufwene, S. (1996). The founder principle in creole genesis. *Diachronica* 13(1): 83–134.
- Mufwene, S. (2008). *Language evolution: Contact, competition and change*. London: Continuum.
- Noll, V. (2008). *O português brasileiro: Formação e contrastes*. Sao Paulo: Globo.
- Noll, V. (2012). Mudanças na realização de /r/, /r̥/ em português. In T. C. F. Lobo *et al.* (eds.), *ROSAE: linguística histórica, história das línguas e outras histórias*. Salvador: EDUFBA.
- Oushiro, L. & Guy, G. R. (2015). The effect of salience on co-variation in Brazilian Portuguese. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics (Selected Papers from New Ways of Analyzing Variation)* 21(2): 157–166.
- Oushiro, L. & Parafita Couto, M. C. (2018). Old variants, new meanings: Resignification of rural speech variants in São Paulo's urban ecology. In D. Smakman *et al.* (eds.), *Urban sociolinguistics: The city as a linguistic process and experience*. London: Routledge.
- Rennicke, I. E. (2015). Variation and change in the rhotics of Brazilian Portuguese. PhD dissertation. Minas Gerais: Universidade Federal de Minas Gerais.
- Sakurai, C. & Coelho, M. P. (2008). *Resistência & integração: 100 anos de imigração japonesa no Brasil*. Rio de Janeiro, RJ: Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística (IBGE).
- Siegel, J. (1985). Koines and koineization. *Language in Society* 14(3): 357–378.
- Trudgill, P. (1986). *Dialects in contact*. Oxford: Blackwell.